九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Barbey d'Aurevillyの《Les Diaboliques》

田中, 栄一

https://doi.org/10.15017/2332771

出版情報：文學研究. 68, pp.15-30, 1971-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

Barbey d'Aurevilly の ≪*Les Diaboliques*≫

田　中　栄　一

Jules-Amédée Barbey d'Aurevilly (1808—1889) の ≪*les Diaboliques*≫ (1874) は，作者の中心となる作品であることは論を俟たない．Armand le Corbeiller も指摘する如く，この作品は，Victor Hugo の ≪*les Misérables*≫，Flaubert の ≪*Madame Bovary*≫，Lamartine の ≪*le Lac*≫，Corneille の ≪*le Cid*≫ と同様に，≪événement≫ としてその作家の中心をなす作品である．[1]

1871年とそれに続く1872年，この間 Paris での短期間の滞在を除いて，彼は生地 Saint-Sauveur-le-Vicomte に近い青年時代に大きな影響を受けた町 Valognes に引き籠った．Normandie の一寒村 Valognes は，彼に若き時代の sensuel な日々を想起させたのであった．1871年10月，彼は ≪Memorandum≫ に Valognes について次の如く記している．「灰色の空，時々青白い太陽が顔を出す．昨日も一昨日も豪雨で烈しい風が吹いた．わたしは宿の暖炉の傍にすわっていた．時々カーテンの隅を上げてどしゃ降りの歩道を見る…わたしがここに着いてからは正にメランコリーに浸っているようだ．」[2] 上のように Valognes の陰鬱な雰囲気を描いているが，一方また次の如く記している．「昨日 Valognes から Saint-Sauveur に行く馬車の中で会った，わたしの ≪Diaboliques≫ に入れるべき女性…」以下その女性の顔付きの精細な描写が続く．また次の如き描写もある．「ある広場に白い雨戸の白いカーテンの小さなきれいな家があった．一幸福の巣一もし幸福が巣をもつならば，そして少し離れたところに同じような家が先の家と交叉する．(faire fourche) それは diable の

fourche ではないことは間違いないが…このように街角まで続く,」[2] Valognes についての上記の二面の性格，即ちその風土の陰鬱さと≪diabolique≫ な atomosphère とは，作品 ≪*les Diaboliques*≫ の解明の鍵になるものと考えられる．既に 1850 年 ≪la Mode≫ に発表された ≪*les Diaboliques*≫ の一つの小説 ≪le Dessous de cartes d'une partie de whist≫ を除く 1866 年頃より始められた他の五つがこの Valognes でその完成を見たのである．最初の一つが発表された 1850 年と，≪*les Diaboliques*≫ の発刊をみた 1874 年に至る約二十年の時の流れは，後述する如く彼の本質にも触れる意味をもつ才月である．今ここでは Barbey の Valognes の町に対する異状な執着に注目するだけにとどめておく．

Eugénie de Guérin が Barbey d'Aurevilly を評した次の言葉は，彼の本質をよく把握した評言というべきである．≪Vous êtes un beau palais dans lequel il y a un labyrinthe.≫「美しい宮殿」とは理想主義を掲げるアリストクラート，妥協を潔しとしない公正さ，独立不羈などの弧高な姿を表現している．「迷宮」とは彼の内面の不可解性を指摘している．Barbey を「生ける矛盾」と評した言もあるが，人間本性の内的矛盾は常とはいえ，彼の本質こそその最たるものと言える．「Barbey d'Aurevilly の矛盾は次の二面に現れる．一つは外的な面での矛盾，即ち，実際の彼と，そう見せたい彼との間の矛盾である．他の一つは，内的な面での矛盾，即ち，実際の彼と，そうであると信じている彼との間の矛盾である．」[3] この矛盾は彼の性格の意志的であると同時にメランコリックな点に現れるが，これは彼の生れた土地の風土に大きく支配されていると考えられる．更に，Barbey の支配的な性格を若干指摘すると，まず「力」あるいは「行動力」を認めることができる．これは情熱の強さ，意志の強さ，自己制御力の強さ，などに現れる．行動力は彼にとっては，ある意志の完遂という意味をもち，こうした行動力は思考に勝るものであった．従ってまた Barbey は，平板さ，俗悪さに挑戦する．これは彼のアリストク

ラートとしての自負である．と同時に，自己の才能，独創性に自信をもつという証拠ともなる．ただ Barbey の性格を余りにも図式化し，単純化して考えることは避けねばならない．上の如き種々の矛盾を含んだ本性だからである．「Barbey d'Aurevilly は肉慾的であるとともに禁慾的である．奢侈，豪奢を好みながら，しかも僧侶になろうと考えたこともある．また彼は非妥協的であり，沈着冷静を志ざす．一方やさしい感じ易い心をもっているのである．」[4] Barbey の性格で今一つ重要な傾向がある．それは精神的不安と焦慮である． dandy の派手過ぎる道化師のような服装に包まれた体内に，彼は常に悲哀を秘めていたのである．≪Ange blanc≫と呼ぶ恋人，永久に結ばれなかつた Mme de Bouglon からの便りを待つ間の悲哀は，その時期の≪Memorandum≫の殆ど各頁に散見しうる．この悲哀内至は不安，焦慮は，若さ故のポーズ，あるいはロマン派的なポーズではない．それは死の直前まで彼につき纏ったものであり，彼の本質と見るべきである．またこれは，彼の生地の物心両面の冷酷さとも結ばれる精神的風土と見なしてもよいであろう．「社交界に身を置き，談笑のさ中に於てさえも，わたしは一人である．深く孤独である．」[5] と彼は言う．また 1885 年 Mme de Bouglon に宛てた書簡にいう．「わたしはあなたと結婚しなかった．だがいつも愛し続けた．…わたしの人生は孤独の裡に過ぎ去った．わたしが醸し出した少しの風評，あるいは醸し出すであろう風評も，わたしの孤独を満してはくれず，またその代償ともならないであろう．」[6] 上記のような Barbey の性格気質は，ある評者は彼を ≪Attardé romantique≫ と呼び，また他の人は ≪réaliste et naturaliste≫ と呼ぶ所以のものである．

さて，≪*les Diaboliques*≫ の最初の計画とその配列について， Barbey d'Aurevilly 自身次の如く記している．「1866 年 12 月現在，わたしが準備している小説集は ≪*les Diaboliques*≫ のタイトルをもち，次の如く構成される．1. Le Rideau cramoisi, 2. Le Dessous de cartes d'une partie de whist (既発表), 3. Le plus bel amour de Don Juan,

4. Entre adultères (未完), 5. Les deux vieux hommes d'Etat de l'amour (未完), 6. Le Bonheur dans le crime, 7. L'Honneur des femmes, 8. Madame Henri III (未完), 9. L'Avorteur (未完), 10. Valognes (未完).」[7] J.-H. Bornecque によれば，上記の 7. ≪L'Honneur des femmes≫ は ≪La Vengeance d'une femme≫ の原題であった．また ≪Madame Henri III≫ については，この ≪La Vengeance d'une femme≫ の導入部分にその極めて短かい素描が見られるに過ぎない.[8] とにかく，≪Les six premières≫ の副題をもって ≪*les Daboliques*≫ は発刊をみたのであった．

≪Diaboliques≫ とは如何なる人物であろうか，以下順を追って見てゆくことにする．

まず≪le Rideau cramoisi≫ の Albertine, 彼女はスフィンクスの如き無感動な美しさをもつ女性である．同じ屋根の下の下宿人 Brassard 子爵を見ても眉一つ動かさない．しかし彼女の体内にはあやしい情熱が既に秘められていたのである．彼女の行動は大胆不敵，両親の存在は彼女の意識からは完全に消失している．Brassard 子爵の部屋に音もなく忍び込んだ時でさえ彼女は例の無言，無表情である．このような状態が続いたある夜，彼女は突然子爵の腕の中で息を引きとる．自己の体を焼き尽す目的に向って，何のためらいもなく一直線に突き進む．彼女は悔恨も罪の意識もなく行動する女性である．

次に ≪Le plus bel amour de Don Juan≫ の名は明されていないが十三才になる少女．彼女は Don Juan, Ravila de Ravilès の恋人の娘である．(なお Barbey はこの Don Juan に自分の prénom である Jules-Amédée を冠している.) 娘は母親の恋人を憎んでいるかに見える．しかしこの憎しみの中に，実は彼女の意識しない情熱が存在していた．ある日 Ravila の坐していた椅子に腰をおろす．そして異状な感覚を身に覚えたのである．この自己の情念に気付くや彼女は罪の意識をもつ．この種の女性はむしろ「清純」のレッテルを貼られがちであるが，作者 Barbey はそ

こに「悪」を見るのである．なぜなら「悪は人間本性に密着したものであり，また最も無垢な魂にも意識しょうとしまいと存在し得るもの」[9] であるからだ．

≪le Bonheur dans le crime≫ の Hauteclaire Stassin. 彼女は恋人の Savigny 家に召使いを装って入り込む．恋人の妻が病気となる．共謀して男女は毒薬を Savigny 夫人に飲ませる．かくして二人は改悛の情もなく，世間の風評も意に介せず，幸福をつかみ取る．Hauteclaire Stassin は沈着冷静，冷酷そのものに事を運び自己の目的を手中にする．この点に於て ≪le Rideau cramoisi≫ の Albertine と軌を同じにする女性である．また恐怖が慾望を伴い，悦楽を増していることも同一と言える．彼女は「目的のために身をくずしても手段を選ばぬ点で diabolique であり，また彼女の身の裡に燃える情念の故に diabolique」[10] である．かくしてこの世では，罪のなかに幸福が存在することが可能である．悪は必ずしも善に打ち負かされるとは限らない．Hauteclaire がまさにその悪である．

次には ≪le Dessous de cartes d'une partie de whist≫ の Tremblay de Stasseville 夫人．彼女も Albertine や Hauteclaire と同族の女性である．この小説は六つの中で最も早く 1850 年に発表されたことは前にも記した．作中の話者も言う如く，このドラマは「残酷極りない恐ろしいドラマであり，それは人々が毎日その役者たちを目のあたりにしてはいるが，決して人々の面前で演ぜられはしないもの」であり，「思わざるところに存在する」[11] ドラマなのである．Tremblay de Stasseville 夫人の屋敷にスコットランド人 Marmor de Karkoël が来る．彼は whist の名手でこの勝負のみが彼の関心事である様子．作中の話者はある日この Karkoël が指輪にインドの猛毒を仕掛けているのを目撃する．さて程なく Stasseville 夫人の娘が病に倒れ，時を経ずして死亡する．その後相当の年数を経たあとで，話者は Karkoël がインドに帰り，Stasseville 夫人も娘と同じ死に方をしたことを知る．また同時に事件の全貌が

明らかになる．Stasseville 夫人は実は四年前から Karkoël の恋人であり，その娘も同じ男を愛していたこと，更に夫人の屋敷の内部にある木犀草の温室の下に幼児の死体が発見されたことを知る．Stasseville 夫人は嫉妬する娘を毒殺し，更に Karkoël との間の子をスキャンダルを恐れて殺害し，最後に Karkoël に捨てられ自殺したのであった．「思わざるところに存在したドラマ」は演じ終えられた時初めてその真相を現わしたのである．この Stasseville 夫人こそ最大の ≪Diabolique≫ であろう．

次に ≪A un Dîner d'athées≫ の Rosalba．ナポレオン帝国が崩壊し多くの兵士が職を失った．自分たちが無用になった恨みを神にまた王にぶち当てる．毎金曜日こうした人間たちが Mesnilgrand のもとに集る．この小説は彼らの語る冒瀆の物語が中心となる．彼らは悪が悪である故に悪を行うといった種類の人間である．最後に Mesnilgrand が語る．スペインでの戦の最中，彼は Rosalba に出会う．ブロンドの蒼白な顔色をした大きな娘，しかし彼女も Albertine 同様秘めた情熱の持主である．Barbey の好んで描くタイプの ≪Diabolique≫ である．副官の Ydow の情婦の彼女を Mesnilgrand も愛すこととなる．しかしある偶然から Mesnilgrand は Ydow と Rosalba との痴情ゆえの争いを目撃し，恐ろしい「封印」の現場に直面する．この「ラファエル画くマドンナの一人のような顔をして，体には diabolique な情熱を秘めた」[12] 女，これが Rosalba の姿である．

最後に ≪la Vengeance d'une femme≫ の Arcos de Sierra-Leone 公爵夫人．この物語の語り手はある日一人の娼婦に会い，彼女の身の上話を聞くことになる．彼女は実は Sierra-Leone 公爵夫人であり，恋人の Don Esteban が夫に殺害された復讐のため身を娼婦に落し，Sierra-Leone という高貴な家名を汚すことを意図したのであった．夫の名を汚すことにより，彼女も自己の名も生命も失った．彼女の意図は直接夫を殺害することではない．それは余りにも容易で瞬時のことであるからだ．彼女はより残酷な，より時を要する復讐を選んだのである．この点に於いて

「彼女は Hauteclaire や Stasseville よりも diabolique である」[13] と言える.

以上《*les Diaboliques*》の六人の女性たちを検討してきたが, 先に述べた如く, Barbey d'Aurevilly の悪についての考えは,「悪」は人間本性に密着したものであり, また最も無垢なな魂にも意識しようとしまいと存在し得るものであった. 《*les Diaboliques*》の《Préface》(1874) に見られる最後の一行は上記の思想と深い関係がある. 《Après les "Diaboliques", les "Célestes"… Mais y en a-t-il?》と彼は言う. 《Diaboliques》のあとに《Célestes》が来る.「しかし果して存在するであろうか」という疑問はこの書物の余韻として読者の心に残る. Barbey 自身はその疑問に対しては《Célestes》の存在の可能性を殆ど否定していると思われる. 何故なら, Barbey の catholicisme は必竟 diabolisme であるからだ.

ではこの Barbey の「悪」, 即ち《Diable》の本質は何であろうか. 上に述べた《Diaboliques》たちの「悪」への顚落は, すべてその leitmotiv が《passion》であったことに注目すべきであろう. これはまた Barbey の生涯を通じての《obsession》であった. それも外部から遮蔽された人間本性の内奥にひそむ《passion》であり, Barbey のいわゆる《diabolisme》はここにその根源をもつのである. 《Préface》において彼は言う. 《Les "Diaboliques" ne sont pas des diableries; ce sont des "Diaboliques".》[14] 彼の《diabolisme》はこの小説集に限れば, 《diableries》即ち《surnaturel》な何ものかではなくて, あくまで人間が《diable》的なのである. ここに Barbey の《diabolisme》の特異性があると考えられる. 上記六人の女性の行動には《surnaturel》なものの介入は全く見られなかったことを想起すべきであろう.[15] 一方われわれの知る限りでは, 古くは例えば Dr. Robert Cornilleau の《Barbey d'Aurevilly et la médecine》(1934) や, 最近の J.-J. Lefrançois と J. Petit の小論文《Les Thèmes physiologi-

ques≫[16] (1967) などのいわゆる ≪médical≫ な面からの考察で，女主人公たちに ≪névrose≫，あるいは ≪psychonévrose thyroïdienne≫ などの「診断」を下して Barbey の diabolisme の解明しようという一傾向も見られることを指摘しておく．Barbey が医学に精しかったことは事実であるが，しかしわれわれはやはり ≪moral≫ な面を重要視したい．

Barbey の ≪diabolisme≫ には ≪passion≫ が重要な要素であることは既に見た．更に ≪Le Diable est comme Dieu… Diaboliques! Il n'y en a pas une seule ici qui ne le soit à quelque degré. Il n'y en a pas une seule à qui on puisse dire sérieusement le mot: ≪*Mon ange*≫ sans exagérer…≫[17] と ≪Préface≫ に記している．ここに見られるように，Barbey にとっては Diable は Dieu と同じであり，小説中の女性も本心から ≪mon ange≫ と呼べる女性ばかりである．そんな女性の中に彼は自分の女であった Vellini の如く，≪démon animal≫ となる要素を看取したのである．≪le Dessous de cartes d'une partie de whist≫ の語り手は次のように述べる．

≪Oui, c'est affreux; mais est-ce vrai? Les natures *au cœur sur la main* ne se font pas l'idée des jouissances solitaires de l'hypocrisie, de ceux qui vivent et peuvent respirer, la tête lacée dans une masque. Mais quand on y pense, ne comprend-on pas que leurs sensations aient réellement la profondeur enflammée de l'enfer? Or, l'enfer, c'est le ciel en creux. Le mot *diabolique* ou *divin*, appliqué à l'intensité des jouissances, exprime la même chose, c'est-à-dire des sensations qui vont jusqu' au surnaturel. Mme de Stasseville était-elle de cette race d'âmes?…≫[18]

顔に仮面を付けた偽瞞の秘密な悦楽は，外から窺い知れないが，そうした人間の感覚は地獄の深みで燃える焔の如きであると考えられはしないか．地獄とは凹んだ天である．語り手はもちろん作者の代弁者である．≪diabolique≫ という語は ≪divin≫ という語と置き換え得る語として

使用されている. ≪Le Diable est comme Dieu≫ なのである. また先に指摘した如く, Barbey のCatholicisme は必竟, Diabolisme なのである. この点を更に検討する前に Barbey の ≪passion≫ について少し付言する.

彼の ≪passion≫ はその燃焼する「場」が必要であった. この「場」が反対に Barbey の ≪passion≫ の特異性を説明する. そして彼の小説世界の陰惨な ≪tragique≫ な性格を強める決定的な要素となっていることは看過すことができない.

「Barbey d'Aurevilly の小説には殆ど一つの町しか出てこない. それは Valognes である.」[19] と J. Petit は言う. ≪*les Diaboliques*≫ に限って見ても, ≪le Rideau cramoisi≫, ≪le Dessous de cartes d'une partie de whist≫, ≪le Bonheur dans le crime≫, そして ≪A un Dîner d'athées≫ の四つの「場」がいずれも Valognes である. (≪le Rideau cramoisi≫ の Evreux は, その町の描写から Valognes であるという推定が成り立つ.) Barbey はこの Valognes の町に叔父をもち, その息子の Edelstand は, 若き Barbey の思想の形成に大きな影響を与えたことは既に知られている. また Edelstand の妹 Ernestine du Méril は Barbey の若き日の恋人であったことも周知の事実である. ただ Valognes の町は Barbey にとって隅々まで熟知した町ではなかった. 1871年10月9日の ≪Disjecta Membra≫ に次の如く記している.

≪Je découvris alors tout un Valognes que je ne connaissais pas. Je connaissais le Valognes aristocratique, le Valognes aîné, le Valognes de *mon oncle*, le plus majestueux maire de ville qui fût jamais. Mais le second Valognes, le Valognes de la paroisse cadette, qui s'appelle *Allaume*, j'en connaissais la délicieuse église et c'était tout. Dans une gamme tout autre, c'est un Valognes très différent du premier, non moins charmant, mais de tout autre charme…≫[20]

昔，叔父のもとで過した時の Valognes とは異った第二の Valognes に彼は1871年に初めて触れている．≪*les Diaboliques*≫ 発刊の三年前である．だがこの Valognes も昔とはちがった≪charme≫があると言っている．≪charme≫あるいは≪charmant≫という語は Barbey が好んでこの町に冠した語である．Valognes は不思議な力で彼をとらえる町なのである．生地 Saint-Sauveur は父との争いなどいやな思い出しか彼に残さなかった．そんな日々 Saint-Sauveur を逃げ，今また Paris を避けて身を隠し得たのがこの Valognes であった．Barbey はしかしこの町を，彼の「師」Balzac 風に正確に描写しようとしたわけではない．彼に必要なのはこの町の atomosphère なのであった．それを彼は再生し，また創り出そうと試みた．

Valognes は Barbey にとってもう一つの意味をもっていた．Valognes が彼をつかんで放さなかったこと，換言すれば，彼にとっては Valognes の町が牢獄[21]の如き意味をもっていたことである．

≪Il semblait qu'en se retirant de toute la surface du pays, envahi chaque jour par une bourgeoisie insolente, l'aristocratie se fût concentrée là, comme dans le fond d'un creuset, et y jetât, comme un rubis brulé, le tenace éclat qui tient à la substance même de la pierre, et qui ne disparaîtra qu'avec elle.≫[22]

ブルジョワジーから追われたアリストクラシーが，この町へまるで「るつぼ」の中に吸い寄せられるが如くに集中して来る．そしてここで最後まで光を放ちながら消えて行くのである．「るつぼ」の町，これはいわゆる≪abîme≫なのである．この≪abîme≫の image は≪Enfer≫に通じる．Barbey の「師」Balzac の作品はもとより同代の作家にはこの概念は可成り浸透していたことは事実である．[23]Barbey の≪passion≫の「場」はこの Valognes，彼にとって隠れ家でもあり牢獄でもあったこの≪abîme≫である．≪passion≫はそこでその≪diabolique≫な光彩

を放ったのである.

*　　*　　*

1851年 Barbey は《Une vieille maîtresse》を発表した. 再版は1858年に出されたが, 大いに敵をもち攻撃を受けた. そこで Barbey は同年と1865年の二度に亘り重要な《Préface》を附した. 特に1865年のものは彼の《Catholicisme》解明に役立つものである. 以下その内容を簡単に検討して行く.

1851年この《Une vieille maîtresse》が発表された頃は Barbey は《Eglise》の敵ではなかったが単に《baptême》と《respect》による信仰であり, 現在の《foi》と《pratique》の信者ではなかったと言う. 従って今の段階で過去の「情熱の陶酔ばかりでなくそれへの隷属」を描いた小説を判断してもらっては困ると言う. しばらく彼の主張するところを聞こう. そこでこの小説とその作者の信仰の矛盾を今取り除かねばならない. この小説を再版したからにはその責を取らねばならないが, この書が自ら真理そのものと思う教義に矛盾しているとは決して考えない. 責任をとるべきだと思う三行の描写を削除したこの小説は, 立派に文芸作品としてその価値をもつものと信ずる. 文芸作品は情熱を描くことがその目的だからである. これなくしては芸術もなく文学も存在しないであろう. もっとも情熱を過大描写することは, 作家の自由の乱用である.

自分は今では情熱をそのありのままの姿で, また見たそのままを描く小説家なのである.「自由思想家」の小説家のように, 情熱を人間の権利としたりまた未来の宗教とするようなことはしない. ただできる限り力強く表現したまでである. この点を批難されているのだろうか. 画家としてその色彩の鮮烈さの故に自ら《catholiquement》に批判せねばならないのだろうか…言い換えれば, 自分に対して提出された問題はこの書の作者に投げかけるよりも更に高く一般的な問題ではなかろうか. またその問題はカトリシスムの敵がわれわれ信者に触れることを禁じている「小説」一

般の問題ではなかろうか．≪Catholiques≫たちは，汚れなき手をもつべきであり，小説などに手を染めるべきではないと「自由思想家」は考える．また劇にも同じことが言える．これもまた情熱の所産だからである．つまり芸術にも文学にも何にも手を触れてはいけないのだ．

ここで Barbey は「自由思想家」が Catholicisme の本質を知らないことを批難している．彼はその本質を次の如く記している．

≪Ce qu'il y a moralement et intellectuellement de magnifique dans le Catholicisme, c'est qu'il est large, compréhensif, immense; c'est qu'il embrasse la Nature humaine tout entière et ses diverses sphères d'activité … Le Catholicisme aime les arts et accepte, sans trembler, leurs audaces. Il admet leurs passions et leurs peintures, parce qu'il sait qu'on en peut tirer des enseignements, même quand l'artiste lui-même ne les tire pas.≫

Catholicisme の壮大さ，寛容さ，人間本性とその活動範囲全般への理解度の大きさなどを賞讃している．特に≪passion≫の描写を許すこと，作者は知らないが，人はそこから教訓を学びとることを強調している．古来 Catholicisme の芸術に示した寛容さを説明している．Barbey は問う．Catholicisme がいつの時代にたとえ恐ろしく罪あるものであれまたそこに血があり泥がある人間情熱の深淵を明らかにすることを禁じたであろうか．小説を書くこと，たとえ≪réelle≫でなくとも≪possible≫な人間の歴史を書くことを禁じたことはなかった．ただ小説が悪徳や錯誤の宣伝となってはいけない．この制限を守れば Catholicisme は才能の翼を切るようなことは決してしないと Barbey は言う．

次に Barbey は Shakespeare の≪Richard III≫の例を引用し，夫の殺害者と結婚する女性は真実でありまたそれ故美しいとさえ言い，絶対の真である Catholicisme はこの真実と美とを否定しないと記している．彼によれば芸術家の使命は，現実ありのままを描き，罪であれ美徳であれ人間現実を把握し，理想にまで鮮明に描くことである．また芸術家は

「思想の警視総監」であってはならないのである．一つの現実を「創造する」こと，これが使命なのである．

これに対して作品の道徳性だとか，公衆の道徳性への作品の影響大であるといった反駁があるであろう．そうした批難に対してBarbeyは次の如くに答える．芸術家の道徳性は彼の描写の≪force≫と≪vérité≫にある．≪vérité≫は決して≪罪≫であり得ない．≪vivante≫な芸術作品から≪罪≫を求めるのは求める方が悪いのだ．Raphaël画く女性を見て慾望の鞭を感じるのは，そうした放埒な想像力こそ悪なのである．ある人々にとっては全てが堕落の機会となるであろう．Catholicismeは「善」と「悪」の≪science≫である．そして心の底を推し測り，魂の中を覗きこむ．こうしたCatholicismeの精神そのままを小説にもちこんだまでであり，道徳破壊呼ばわりなど心外であるとBarbeyは言う．そして最後に≪passion≫は≪révolutionnaire≫であるからこそ，その特異な形態のもとに描き出したのである，と結んでいる．

以上1865年の≪Une vieille maîtresse≫の序文をBarbeyの主張を通して検討してきた．これにより彼は≪Catholicisme≫内至は≪roman catholique≫に対する概念を展開したのである．われわれが既に見た≪*les Diaboliques*≫の≪Préface≫にも同じ概念の披瀝があった．

≪Bien entendu qu'avec leur titre de *Diaboliques*, elles n'ont pas la prétention d'être un livre de prières ou d' *Imitation chrétienne* … Elles ont pourtant été écrites par un moraliste chrétien, mais qui se pique d'observation vraie, quoique très hardie, et qui croit — c'est sa poétique à lui — que les peintres puissants peuvent peindre et que leur peinture est toujours assez *morale* quand elle est *tragique* et qu'elle donne *l'horreur des choses qu'elle retrace.*≫[24]

果して彼は言う如くにカトリック作家といえるであろうか．P. J. Yarrow[25]によれば，Barbeyのカトリック小説は次の三点に要約できる．

即ち，第一に Barbey のそうした作品には ≪surnaturel≫ が大きくはないがある役割をなしていることである．これはわれわれが今問題にしている ≪*les Diaboliques*≫ には見られないことは前述した．第二に ≪Eglise≫ とそれに携わる聖職者がその善の面から描かれていること．この点も今われわれの論点から除外してもよい．問題になるのは次の第三である．即ち Barbey はカトリック小説に於て，全てをつまり情熱や悪までをも描写し得る自由を要求していることである．これは上記引用の ≪Une vieille maîtresse≫ の序文および ≪*les Diaboliques*≫ の序文に繰り返し Barbey が主張するところである．

Barbey のいわゆる ≪conversion≫ は1846年彼が ≪Société Catholique≫ の一員となり，≪La Revue du Monde Catholique≫ 誌の初号が発刊された時と見るのが定説である．この ≪conversion≫ と小説観との関係はどうであろうか．「われわれはこの ≪conversion≫ は彼の思想を変えたにしても極く表面的で一時的なものだったと考える．」[26] のが妥当である．Yarrow も Barbey の思想は，1840年頃と殆ど変化がなかった旨を指摘している．[27] 更に Barbey が ≪Société Catholique≫ の一員となったことと彼の ≪conversion≫ との直接の関係はなかったとし，この ≪conversion≫ は単に ≪intellectuelle≫ なものであったと付言している．≪Une vieille maîtresse≫ の序文が1865年であり，≪*les Diaboliques*≫ のそれは1874年である．しかしこの小論の冒頭にも記した如く，この小説集のうち ≪le Dessous des cartes d'une partie de whist≫ は1850年発表であり，その他の五篇も1866年頃より執筆が始められている．彼の小説の中で最も ≪catholique≫ と評せられている ≪Un Prêtre marié≫ の完成が1864年であるが，その発想は1855年に遡る．ただこの小説が他の Barbey の作品に比して，より ≪catholique≫ であるという評も今や疑わしい．これは父の罪を美徳と献身とで償なわんとする娘の物語であると同時に，修道尼から愛されんとする青年の物語ではないだろうか．従って ≪conversion≫ は Barbey の小説に関

する限り，殆どその影響を認めることはできないのである．「全てを情熱や悪徳までも描く自由」と Barbey は言うが，彼は《roman catholique》と《roman d'un catholique》を識別していなかったことによる．[28] 彼は小説を書く時に自分が catholique であることを忘れたのではなく，catholique 作品を意図していることが等閑に附されたと言うべきであろう．また絶えず念頭から離れない《obsession》に小説の題材を求めたことが上記の如き矛盾を生ぜしめる根源があったと言わねばならない．

ここでやはり冒頭に述べた Barbey の性格の矛盾性に立ち帰ることになる．「力」の信仰，傲慢とも見える反骨精神，sensuel な感覚，ロマン派的愛への渇望，すべて catholicisme と融合し得ない本性である．かくして生れるべくして生れたのが《*les Diaboliques*》である．しかし，Barbey は決して生涯誠実さを欠いたことは一度もなかったということを付言しておかねばならない．

(終)

〔註〕

1) Armand le Corbeiller: "Les Diaboliques de Barbey d'Aurevilly". (1939) p. 159.

2), 2') "Compléments aux Memoranda". (Bibliothèque de la Pléiade, "Œuvres romanesques complètes" II.) p. 1570.〔以下 B.P. と記す〕

3) Pierre Colla: "L'Univivers tragique de Barbey d'Aurevilly" (1965) p. 12.

4) P. J. Yarrow: "La pensée politique et relgieuse de Barbey d'Aurevilly". (1961) p. 20.

5) "Disjecta Membra". cité par P.J. Yarrow. of., cit., p. 25.

6) P. J. Yarrow. op., cit., p. 26.

7) "Les Diaboliques". Édition par J.-H. Bornecque. p. 1. Jacques Petit は B. P. II. p.1288. において，"Valognes" が "A nn Dîner d'athées" になったものと推定している。

8) "La Vengeance d'une femme". B. P. II. p.230.

9) Pierre Colla. op., cit., p. 58.

10) Ibid., p. 60.

11) "Le Dessous des cartes d'une partie de whist." B. P. II. p. 132.

12) "A un Dîner d'athées." B. P. II. p. 210.

13) Pierre Colla. op., p. 71.

14) "Préface des 《Diaboliques》" B. P. II. p. 1291. "Célestes" の一人に "Un Prêtre marié". (1864) の Calixte がいる Hauteclaire や Rosalba が徹底して「悪」ならば，彼女はまさに徹底した「善」として描かれている。

15) "L'Ensorcelée" (1852) や "Un Prêtre marié." (1864) には "surnaturel" なものの介入がみられる。P. J. Yarrow はこれを Barbey のカトリック小説の第二の特徴として挙げている。

16) "La Revue des Lettres modernes, Barbey d'Aurevilly, 2." (1967) pp. 33-50.

17) B. P. II. p. 1291.

18) "Le Dessous des cartes d'une partie de whist." B. P. II. p. 155.

19) "La Revue des Lettres modernes, Barbey d'Aurevilly, 1." (1966) p. 7.

20) B. P. II. p. 1570. cité par J. Petit.

21) "La Revue des Lettres modernes, 1." p. 18.

22) "Le Dessous des cartes d'une partie de whist." B. P. II. p. 134.

23) cf., Luzius Keller: "Piranèse et les romantiques français." (1966)

24) B. P. II. p. 1290.

25) P. J. Yarrow. op., cit., pp. 186-187. cf., 註 (15).

26) Ernest Seillière: "Barbey d'Aurevilly." (1910).

27) P. J. Yarrow. op., cit., p. 78.

28) Ibid., p. 191.